

Editorial Comment

先天性心疾患術後症例に対する発達促進を目的とした理学療法

国立病院機構弘前病院
五十嵐勝朗

重症の心疾患を有し、さらに手術という非日常の環境の変化が、乳幼児の発達過程に重大な影響を与えていることは事実である。特に集中治療としての鎮静や姿勢管理の制限などは、正常な発達を大きく制限することは十分に予測される。その機能障害 (impairment) をいかに早期に取り戻し、正常な発達線上に乗せるかは小児循環器科医はもちろんのこと、医療従事者全員の課題である。

術後の乳幼児への介入は発達の面から非常に重要なことである。これまではこの分野への evidence-based medicine (EBM) に則った対応の遅れにだれもが気づいていたが、研究および実践は、特に本邦では遅れていた。これからはこの分野の研究を大いに推奨すべきである。その研究方法はいろいろあるが、齋藤論文は発達促進に理学療法を取り入れ、試みたものである。

これまでは乳幼児の救命が主であったが、最近では小児循環器外科医の医療技術の進歩により複雑心奇形の修復手術には目を見張るものがあり、治療成績の向上は著しい。そのために一歩進んで術後の乳幼児の quality of life (QOL) の向上が関心の的になりつつある。

リハビリテーション部門は QOL の向上の面から重要な部分を占める。それについては医師を中心としてコメディカルが十分な知識をもつことが重要である。理学療法は障害をもつ人への治療として必須であるが、発達過程の乳幼児でも活用できる。

発達とは生体が時間的な経過に伴い、身体的・精神的機能を変えていく過程のことであり、言い換えると精神面と運動面の両面で機能的に成熟していくことである。

乳幼児の脳は発達および成熟過程にあるので促進を目的とした理学療法の開始時期は遅くならないほうがよい。脳は身体全体の成長・発育を統括するので、他の器官より早期に発育する。実際に脳は 2～3 歳の間に急激に成長し、3 歳で大脳の形態は成人にほぼ近づく。早期からリハビリテーションの一環として促進に理学療法を取り入れることは有用と考える。小児科医は個々の乳幼児の発達についての知識をもつことが大切であり¹⁾、理学療法士らのコメディカルは小児科医からの適切な指示で協働することになる。術後に健全な回復をもたらす、正常な発達過程を歩むためには、小児科医は乳幼児の発達について十分な知識と理解をもつことが重要である。小児科医は理学療法士などに指示やアドバイスを与える場合は、乳幼児の体力や病状には細心の注意を払い、身体に過度の負担が生じないように心がけることが必要である。可能ならば各職種間の連携によって、それぞれの特徴を生かした包括的な治療体制やリハビリテーション環境、あるいは訓練環境を整えることができれば、さらに質の高い支援が可能である。

これまでの臨床経験から、実際に促進を目的とした理学療法中の乳幼児に、発達の差はあるが成果が出ているとの報告はある。この促進 (facilitation) とは、乳幼児が意図した動作をしやすく、動かしたい部位に刺激を与えて運動を助ける手技である。

発達を領域により、1) 運動機能、2) 知的・認知機能、3) 社会性や情緒の 3 種類に大別することができる。これらは代表的な分類であり、それぞれ単独で認めることもあるが、実際にはおのおのは密接な関係をもっており、重複して存在することが多い。したがって運動、探索・操作を身体的、そして社会、食事、理解・言語を社会、精神的と、大きく分類することができる。齋藤論文は①運動、②探索・操作、③社会、④食事、⑤理解・言語の 5 項目について検討して、理学療法を施行した結果、③社会、④食事、⑤理解・言語のいわゆる社会、精神的発達の改善が顕著であるような印象を受けたと述べている。しかし実際には身体的と社会、精神的とは密接な関係をもっており、重複して存在することが多い。そのために発達を部分的にではなく、総合的に観察し検討することが適当であると考えられる。

齋藤論文は症例数が 5 例と少なく、これで発達への理学療法の効果を論じることには問題がある。発達に対しての理学療法の効果を判定することが目的であればもっと例数を増すべきである。また、対象となる乳幼児は基礎疾患としてなぜ心疾患乳児なのか、投稿誌が日本小児循環器学会雑誌であるからと陳述したいことは承知しているが、心疾患でなくてもよいのではないだろうか。発達への理学療法の効果を論じるのであれば、対象としてはむしろ疾

患の種類に関係なく集中治療管理した乳幼児であればよいのではないだろうか。

また、病悩期間や術後の拘束期間の長短も発達に関与することは容易に考えられる。その一方で、乳幼児の発達する期間や程度²⁾の幅は広く、週単位ではなく月単位、また質のこともある。これらを考慮して、しかも科学的に判定することは大切であるがために、非常に難しいことも推察される。それらを克服して効果判定を価値あるものにするためには、より多くの症例を対象にして検討するのが最短距離であろう。

【参考文献】

- 1) 五十嵐勝朗：診断に役立つ乳幼児の生理学。東京，金原出版，2007
- 2) 國土将平：発育段階と子どもの遊び。子ども発育発達 2003；1：143